

特1  
2216

増補 櫻に関する圖書解題略



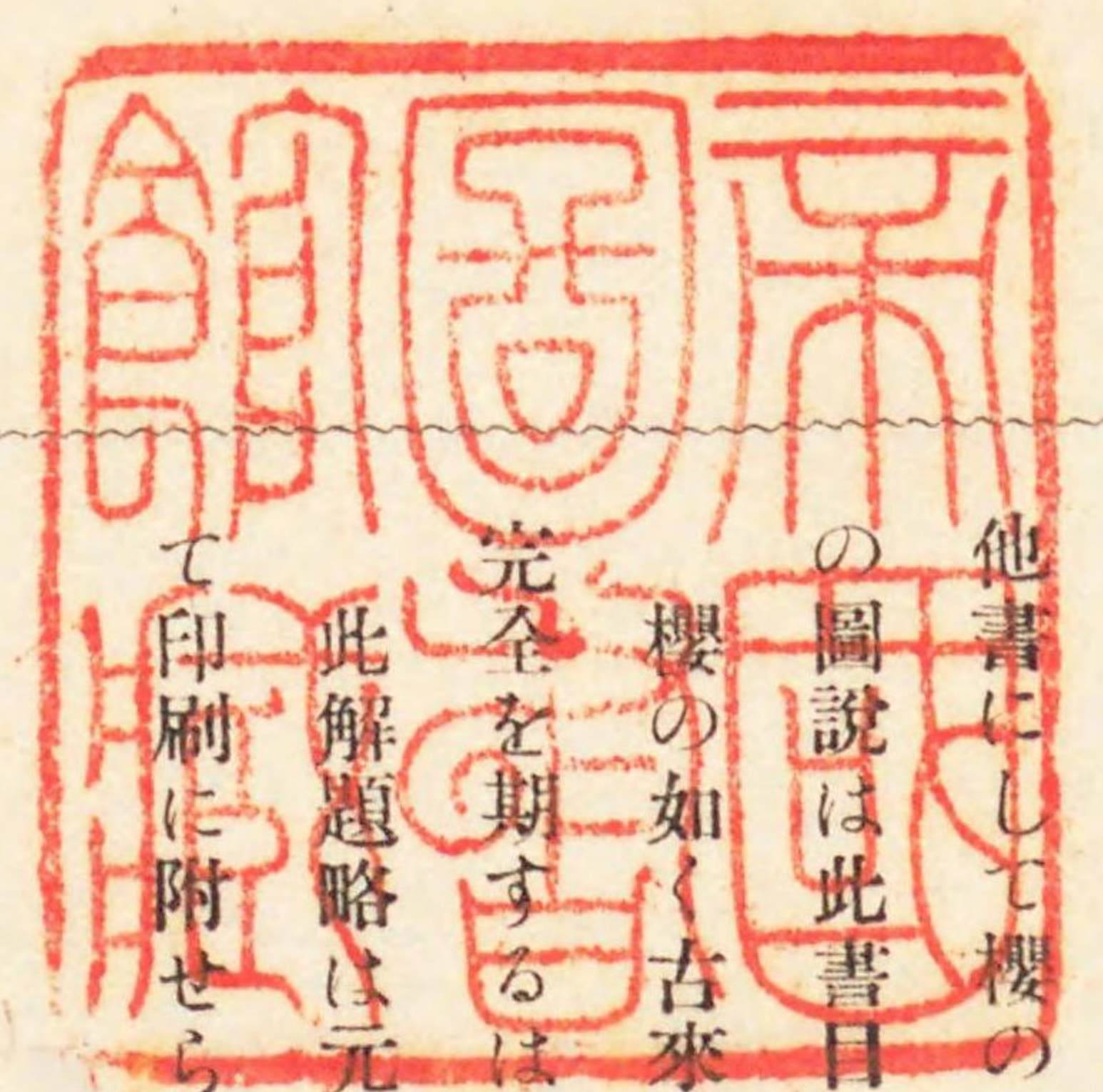
櫻花概説正誤

九八二七	四八	四二二	二二五	一五	一三	三九	二八	同	一三	(頁)
六〇	七	二七	四	四	二	一	二	一	一	(行)
一册	略地	政十年	窪詩佛	菟道	一々の	櫻の	花見日記	關東	花は小さく	(誤)
一組	略地	文十年	大窪詩佛	菟治	一々の	中の櫻の	花見日記	關東	花は小さく	(正)

此に排列したる書目は予が年來櫻に關し汎き範圍に於て蒐集したる所藏圖書に依るものにして、一々簡單なる解題を附けたり。題目内容共に櫻に限れるものを主としたれども、間々他書にして櫻の記事あるもの又は櫻の圖あるものをも採れり。唯名所圖繪の類に載せたる櫻の圖説は此書目には省けり。是れ後日別に表出せんと欲すればあり。

櫻の如く古來我邦の國民性に深き關係あるものにては、之に關する圖書甚多く、其蒐集の完全を期するは容易にあらず。故に此書目の如きも固より一斑を示すに過ぎざるなり。

此解題略は元本年三月二十八日南葵文庫にて予が櫻に就ての講演を爲せるとき、同文庫にて印刷に附せられたるものなるが、今之に其後に獲たる圖書をも追加して、印刷に附せり。



大正九年十二月廿一日

三 好 學 識 ず



特 1  
2216

補增  
櫻に關する圖書解題略

目次

一品種	一
二 寫生圖	一四
三 繪畫	二八
四 墨跡	三四
五 雜說	四一
六 詩歌併	四五
詩	四五
和歌	四九
狂歌	五三

目次

一



併句……………五七

七名所……………六〇

吉野……………六〇

櫻川竝雨引山……………七三

嵐山嵯峨東山等……………七五

隅田川……………七九

上野……………八一

小金井……………八二

荒川(江北)……………八七

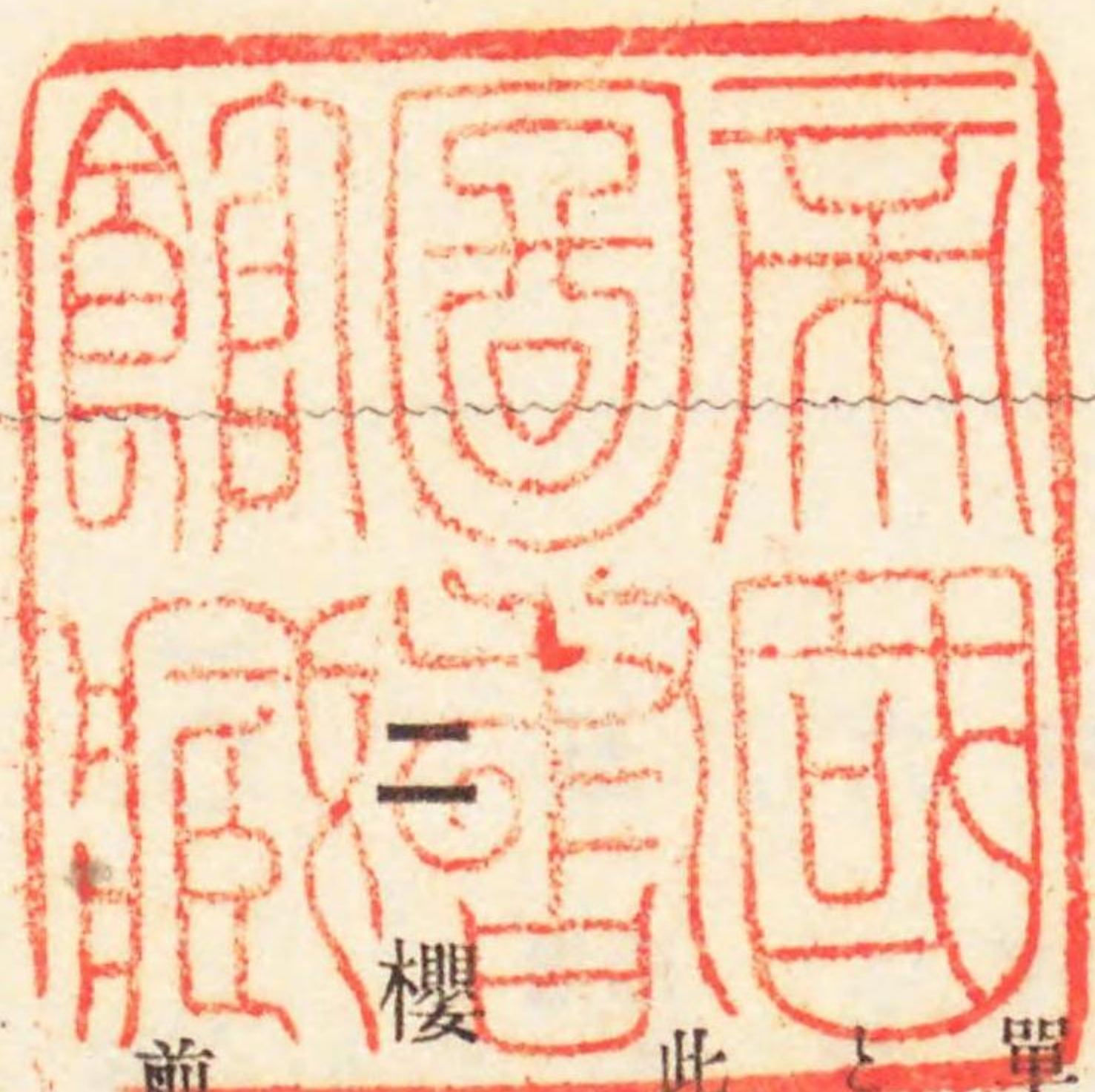
其他の名所……………八八

一品種

一 怡顔齋櫻品

松岡達一 寶曆八年 一册

徳川幕府の中期頃京都其他に存在せる櫻の種類及び品種六十九を擧げ、一々簡  
單なる圖と説明とを附せり。首に山崎闇齋の「櫻之辨」を載せたり。昔時の櫻譜  
として重要なものなり。  
此書に載せたる櫻にして現存せるもの約二十餘あり。



二 櫻

品 雙鶴樓雜纂第五 半紙刷

一册

前記の櫻品を戸塚文雄氏の印刷せしめたるものなり。

三 櫻之辨

櫻品 (甘雨亭叢書別集) 白紙刷

一册

首に闇齋の「櫻之辨」を載せ、次に「櫻品」を載せたり。櫻の品種の記載順序は原



本と同じからず、又圖を缺けり。

四 花段綱目 卷下

水野元勝 一册  
延寶九年

櫻の品種四十を擧げ、一々花の大きさ、色等を記せり。其中の約二十種は現存せり。

五 增補地錦抄 卷三

伊藤伊兵衛 一册  
寶永七年

櫻の品種四十六を擧げたり。其中の約三十は現存するものに屬す。

六 增補花壇大全 卷之一

文化十三年 一册

櫻の品種二十餘を擧げ是に圖を加へ、簡單なる記載を添へたり。

七 花譜 卷二

貝原益軒 一册  
元祿七年

吉野其他名所の櫻竝に櫻の著しき品種に關する記事あり。

八 諸國年中行事 卷二

速水春曉齋 一册  
天保三年

卷末に京都千本閻魔堂の庭前にある普賢象の櫻の圖竝に記載あり。

九 弘治本節用集の一節

伊勢貞丈舊藏の南葵  
文庫藏本より抄寫

一枚

本邦現存の櫻の品種中最古のものと思むべき「普賢象」の名竝に「普賢堂」の名を載せたり。此櫻が已に足利時代に知られたるを證すべし。

一〇 江戸名所花曆 卷一

岡山鳥 一册  
文政十年

江戸時代の上野其他に當時普通なりし櫻の種類竝に品種の花の圖十を掲げたり。

一一 草木奇品家雅見 人

增田金太郎 一册  
文政十年



泰山府君、桐ヶ谷其他櫻の品種百六十餘を番附として載せたり。

二 長者ヶ丸白櫻亭園中百三十六品

一枚

江戸青山長者ヶ丸の久保櫻巖の櫻園にありし櫻品の種類の名を列記したるものにして、百三十六品とあれども、總計百四十品あり。概ね里櫻にして、山櫻は甚少し。又彼岸性の櫻もあり。印刷年代は不明なれども、天保の頃なるべし。當時長者ヶ丸の櫻園は櫻品蒐集によりて其名江戸に喧しく、一の名所となりて花鳥曆の類にも載せられ、人々の遊覽したるのみならず、本草家、畫家、文人、墨客の來りて櫻の變り物を愛でたる所なり。別記の「浩雪櫻譜」に載せたる櫻の寫生材料が長者ヶ丸白櫻亭より出でたるの證は、該櫻譜の櫻名を此一枚摺の櫻名と對照せば明瞭なるべし。一枚摺に載せたる櫻の名は左の如し。

- 御車還 桐ヶ谷 小鹽山 初瀬山 外山櫻
- 御殿山 五所櫻 瀧櫻 虎ノ尾 鷺ノ尾
- 金玉櫻 九重櫻 右衛門櫻 奈良櫻 芳野櫻

品種

- |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| 嵐山櫻  | ヲ若木櫻 | 嫩木櫻  | 小督櫻  | 廊間櫻  |
| 白山旗櫻 | 泰山府君 | 芙蓉峯  | 紅鵜   | 白鵜   |
| 朱雀櫻  | 燕尾櫻  | 紅延命  | 白延命  | 渦櫻   |
| 西行櫻  | 左近櫻  | 熊ヶ谷  | 敦盛櫻  | 箒櫻   |
| 駒繫櫻  | 小町櫻  | 榊花女  | 地主櫻  | 曉櫻   |
| 御園櫻  | 有明櫻  | 殿櫻   | 薄墨櫻  | 芝山櫻  |
| 名島櫻  | 普賢象  | 松月櫻  | 金山香  | 絲括   |
| 小菊櫻  | 蘭奢待  | 柴船   | 楊貴妃  | 爪紅櫻  |
| 松ノ月  | 萬里香  | 千里香  | 鹽竈櫻  | 大膳櫻  |
| 白舞   | 千本櫻  | 淺黃櫻  | 伊勢櫻  | 御室櫻  |
| 一葉櫻  | 御衣黃  | 辨殿櫻  | 雲井櫻  | 南殿櫻  |
| 千代枝垂 | 鶺鴒枝垂 | 芳野枝垂 | 千辨絲櫻 | 玉簾   |
| 山枝垂  | 紅枝垂  | 丁字櫻  | 八重彼岸 | 鶺鴒彼岸 |

五



海棠櫻	人丸櫻	大提灯	小提灯	醍醐櫻
江戸櫻	法輪寺	雪ノ曙	手毬櫻	雪山櫻
隅田川	瀧ノ川	大菊櫻	百枝櫻	吉祥閣
小金井櫻	薄化粧	布引櫻	朝霧櫻	朝日櫻
夕榮櫻	寒緋櫻	帆掛櫻	遅櫻	卯月櫻
常盤櫻	祇王櫻	路頭櫻	樺櫻	香櫻
小春櫻	祇女櫻	禿櫻	千羽鶴	在原櫻
不斷櫻	王昭君	兒櫻	月暈	小梅櫻
享師櫻	袖振櫻	雨宿	婆櫻	手枕櫻
初雪櫻	小式部櫻	紫櫻	姫子櫻	入相櫻
初雁櫻	明石櫻	上溝櫻	筑波根	小緑櫻
元日櫻	一文字	下溝櫻	衣笠櫻	長壽黄金櫻

一三 松乃壽

東都常盤橋通油町 折本一册  
藤岡屋慶次郎版

半紙版の諸番附にして、其中に松と櫻の取組番附あり。大關として奈良都八重櫻を挙げ、總計百十の著名の櫻を載せ、其所在を示せり。又吉野山を始め花の名所十一を挙げたり。

一四 吾妻みやげ 三編

薰々房 一册  
嘉永五年

松と名とを相對して番附に組みたるものを載せたり。櫻の部には奈良の八重櫻以下約百あり、又吉野山を始め京都、江戸其他の櫻の名所十餘箇所の名を記せり。前記の「松の壽」に載せたるものと大同小異なり。

一五 櫻番付

河島銀藏 一枚  
明治四十三年

明治四十年頃に現存せる櫻の品種約百六十餘を番附に組みたるものにして、桐



ケ谷、松月其他の種名を掲げたり。

一六 櫻

白神壽吉 一册  
明治四十四年

櫻の種類の記事、廣島附近の櫻の所在、外國の櫻に就ての雜載及び山櫻の初開線の圖あり。

一七 日本の植物界

三好學 一册  
明治四十三年

櫻に関する概説並に本邦の著しき櫻の種類、品種並に外國の櫻總計八十三を擧げ、其の特徴を説き、着色圖其他の圖を附せり。

一八 優れたる櫻の品種

史蹟名勝天然紀念物 三好學 一册  
第一卷 第十號 大正五年

櫻の來歴、櫻の名所、櫻の品種並に櫻の保護に就て述べたり。

一九 鷄窗漫錄 第一號

明治十二年 一册

卷首に横川の普賢象に関する一文を載せ、尙此櫻の所在を附記せり。

二〇 西行堂中興志

布毛 一册  
天明元年

尾州玉林寺の布毛和尚西行法師の古像を得て之を安置せんが爲め、西行堂を建てんとせる時に集めたる人々の詩文を録せる書にして、首に松平君山の序文ありて、西行堂中興の由縁を記し、次に清客沈婉綸の序、林信徴、布毛等の西行堂の記事あり。又西行木像、西行堂の風景、西行櫻の花、奈良の都の櫻等の圖を載せたり。「西行櫻」の花は閑水の畫によれば五瓣大輪なり。又「奈良の都の櫻」は小輪複瓣にして「櫻品」に載せたるものと同じく、今日稀に見る「奈良の八重櫻」と符合せり。卷末の「西行堂手向花」の編中には横井也有の和歌を首め諸家の詩歌を收めたり。卷末には「張府永樂堂梓」の朱印あり。





二二 櫻花圖考 (櫻第二號)

三好 大正八年 一冊

櫻花圖と題せる稿本が屋代弘賢の選にして三好汝圭の畫にかゝることを考證せるものなり。

二三 市橋長昭撰花譜の解題並に其文献的價值

(東洋學藝雜誌第三十六卷 第四百五十一號及第四百五十二號)

別刷 (十二號)

三好 大正八年 二冊

宮内省圖書寮に藏せらるゝ市橋長昭選「花譜」四冊「追加」一冊に就て其内容を記載し、同書に描かれたる櫻の種類並に品種總計二百五十二の名を載せ、又此書が後世の櫻譜の淵源となれる所以を記し、堀良山の「彙譜」其他の櫻譜が何れもが此花譜より出でたることを考證したるものなり。

二三三

Botanische Studien aus den Tropen, von Manabu Miyoshi. (Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. Vol. XXVIII. Art. 1. 1910.)

此論文の第四〇頁に ひまらやざくらの記載あり。又此櫻と日本の緋寒櫻との差異の點を挙げ、終に ひらまやざくらの寫生圖を載せたり。

二四

Die japanischen Bergkirschen, ihre Wildformen und Kulturrasen, von Manabu Miyoshi. (Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. Vol. XXXIV. Art. 1. 1916.)

序説、櫻の歴史、櫻に関する内外の文献、山櫻及び里櫻の學名の考定に互りて記述し、次で日本の山櫻並に是より出でたる里櫻等總計百三十六の種類及び品種を挙げ、一々の特徴を記載せり。此中白山櫻六十五、紅山櫻十、里櫻六十八、等性三あり。次に里櫻の特徴遺傳に関する試験、櫻の畸態、保存に就て記せり。卷末には銅版圖一枚、寫真版圖四枚、着色石版圖十六枚。網版圖二枚を添へたり。



二五 Der Riesenkirschbaum von Ishido, von Manabu Miyoshi. (Botan. Magaz. Tokyo. Vol. XXX. No. 358. 1916.)

武州石戸の蒲櫻を記載し、且其巨大なる容積に就て観察せる所を記せり。

二六 Untersuchungen über japanische Kirschen I, von Manabu Miyoshi. (Botan. Magaz. Tokyo. Vol. XXXIV. No. 407. 1920.)

(一)彼岸櫻並に彼岸性の櫻の種類に就ての文献的論述、是等の櫻十一の記載、(二)偽彼岸櫻の記載、(三)白山櫻、紅山櫻、里櫻十五の記載あり。

二七 Eine neue Einleitung der Kirschen. Prunus, Subgen. Cerasus, von E. Koehne. (Wiss. Beil z. Jahresh. d. Falk-Realgymnasiums zu Berlin. Ostern 1919.)

著者の見解によれる櫻の分類並に學名に就て記載せるものなり。

二八 The Cherries of Japan, by E. H. Wilson. 1916.

日本の櫻の種類並に品種に就て記述し、寫真圖版を添へたり。

二九 Plantae Wilsonianae. I-II, 1911-1912, by E. H. Wilson.

此兩冊の中には支那の雲南地方に於てウキルソン氏の採集したる野生の櫻の標本數十種をケーネ氏の檢定して記載せるものを收めたり。

三〇 Conspectus Rosacearum Japonicarum, by G. Koizumi. (Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. Vol. XXXIV. Art. 2. 1913.)

書中日本の櫻の種類並に品種の記載あり。

三一 大日本植物志 第一卷第一冊、第四冊 牧野富太郎 明治三十四年、四十四年 二冊



第一冊にはやまざくら（白山櫻）、第四冊にはおはやまざくら（紅山櫻）を記載し、精密なる寫生圖を添へたり。

### 二 寫生圖

#### 三三 山櫻と里櫻 解説附

三好學 三折帙入  
大正五年

前に記載せる歐文の山櫻の野生變種並に其培養品種に載せたる圖を表装せるものにして、櫻の景觀圖、山櫻の圖、里櫻の圖の三部に分てり。解説には櫻の和名と學名とを記せり。

#### 三三 櫻花圖譜

三好學 二冊  
大正十年

彼岸櫻・枝垂櫻・緋寒櫻・染井吉野・白山櫻・紅山櫻・里櫻等總計百十八の着色寫生圖を木版に彫刻して二冊となせるものにして、卷首に和名と學名の見出しあり。圖は嘗て「東京帝國大學紀要理科第三十四冊第一編」に載せたる著者の「山櫻及

里櫻」の論文中より採れるもの、外は新に描けるものなり。

#### 三四 櫻花概説

三好學 一冊  
大正十年

(一) 櫻の種類と名所、(二) 櫻の略史、(三) 普通の櫻の三編に分けて説けり。此櫻の「普通の櫻」は前記の「櫻花圖説」に載せたる櫻に就ての略説あり。本文の外に櫻の種類、櫻の名所、櫻に関する圖書、南葵文庫に於ける櫻の講演會の景況を示せるコロタイプ圖版三十葉を添へたり。

#### 三五 櫻花寫生 第一集

三好學選 四十枚帙入  
西野猪久馬筆  
大正九年

彼岸櫻・山櫻・里櫻・富士櫻等の種類及品種の着色寫生圖を集めたるものなり。

#### 三六 櫻圖説

屋代弘賢選 二冊  
三好汝圭畫

上篇には六十四種の櫻、下篇には三十二種の櫻を描きて其名を記し、又間、和歌



を添へ或は來歴傳説等を記せるもあり。篇中汝圭畫とあるもの三、圖の描方は精粗不同なれども、其精密なるものにて葉の蜜腺、瓣の脈までも現はせるものあり。

此書の解題は「櫻花圖考」として前に出せり。

三七

浩雪櫻譜 (長者丸櫻譜)

坂本浩雪畫  
天保十三年  
増田金太郎舊藏

一折

江戸時代の種樹家青山權田原に住せる増田金太郎の舊藏本にして、坂本浩然(浩雪)の描きたるもの總計百三十六種あり(内二圖紛失)。圖の大きは約竪四寸、幅三寸餘、極彩色にして、浩雪一流の筆意巧妙を極めたり。一圖毎に當時の著名なる俳人鳳朗、卓池、梅室等の句を添へ、末尾には浩雪其他の手簡を貼付せり。紛失圖を除き百三十圖(内辨殿櫻重出)の櫻名左の如し。

- 山櫻 赤葉 二品 同 綠葉 松月櫻 柴船 遅櫻
- 姫子櫻 在原櫻 享師櫻 燕尾櫻 西行櫻

- 婆櫻 一文字櫻 雪ノ曙 泰山府君 雲井櫻
- 下溝櫻 辨殿櫻 駒繫櫻 絲括櫻 鷓枝垂
- 山枝垂 手毬櫻 箒櫻一名天ノ川 數珠掛櫻 不斷櫻
- 眞普賢象 雨宿櫻 常盤櫻 蘭奢待 雪山櫻
- 彼岸櫻 白彼岸櫻 御衣黃 八重彼岸 辨殿櫻
- 祇女櫻 曉櫻 王昭君 薄墨櫻 海棠櫻
- 千本櫻 山形黃櫻 白山旗櫻 祇王櫻 嫩木櫻
- 黃金櫻 夕榮櫻 小梅櫻 南殿櫻 初雪櫻
- 旭山櫻 芝山櫻 左近櫻 敦盛櫻 熊ヶ谷櫻
- 左衛門櫻 有明櫻 小町櫻 大菊櫻 殿櫻
- 元日櫻 布引櫻 楊貴妃櫻 大提灯 千里香
- 紅枝垂 鎌倉桐ヶ谷 月暈 金山香 紫櫻
- 爪紅 芳野枝垂 薄化粧 一名玉藻前 玉簾櫻 江戸法輪寺



丁字櫻	琉球緋櫻	外山櫻	朱雀櫻	人丸櫻
虎尾櫻	御殿山	芳野櫻	小金井	小春櫻
江戸櫻	隅田川	瀧櫻	千代枝垂	御所櫻
入相櫻	伊勢櫻	千羽雀	廊間櫻	芙蓉峯
奈良櫻	香櫻	大膳櫻	醍醐櫻	鷺の尾櫻
紅延命	淺黃櫻	一葉櫻	瀧の川	禿櫻
地主櫻	筑波根	白舞	萬里香	嵐山櫻
吉祥閣	上溝櫻	朝日櫻	初瀬山	鹽竈櫻
小提灯	路頭櫻	朝霧櫻	九重櫻	小綠櫻
手枕櫻	帆掛櫻	名鳥櫻	樺櫻	袖振櫻
樹花櫻	鞍馬山渦櫻	白鵜	小鹽山	紅鵜
初雁櫻	金玉櫻	衣笠櫻		

此櫻譜に描ける櫻は當時青山長者ヶ丸の久保櫻嶺の櫻園に植ゑられたる種類の

寫生なること考證によりて知られたり。元此櫻譜には廣瀬花隱の描ける櫻圖三十六種を添へたりしが、今は之を分ち花隱の櫻譜は南葵文庫の藏となれり。此櫻譜によりて天保時代に普通なりし櫻を知り得るのみならず、同時に長者ヶ丸の櫻園に保存せられたる種類を知るの便あり。

三八

櫻花圖

坂本浩然筆

一册

美濃紙の黒輪廓（縦七寸、横四寸五分）内に櫻花を寫生したるものにして、卷首の松月櫻、（四）燕尾櫻、（五）絞櫻とは各、一頁に寫し、其次より皆二頁（第一枚目の裏と第二枚目の表）に涉りて描けり。圖の大きさは長約四五寸、幅七八寸、筆勢潑刺、色彩妍美なり。圖毎に右の肩に櫻の名を記し、其下に概ね簡單なる記載あり。書中に筆者の名なきも、櫻の描方と云ひ、櫻の名の書體と云ひ坂本浩然の作たること疑なし。圖は總計三十一にして、左記の順序によりて寫生せり。



- 松月櫻 香 櫻白色單葉 泰山府君千瓣 燕尾櫻小瓣
- 絞櫻 小町櫻單瓣、白色 普賢象 有明櫻千葉單葉
- 蘭奢待瓣ホソク 萬里香白色圓瓣 千本櫻單瓣 小金井櫻白色單瓣
- 隅田川中リン單瓣 夕榮櫻紅色單瓣 常盤櫻白色中リン 不斷櫻小輪單瓣
- 享師櫻色小リン 元日櫻小輪單瓣 禿櫻千瓣小リン 兒櫻八重ヒト
- 芝山櫻單瓣、白色 伊勢櫻千瓣 樺櫻 寒緋櫻紅色
- 祇王櫻單葉、淡紅色 祇女櫻單瓣、淡紅色 上溝櫻小リン、白色 下溝櫻小リン、淡紅色
- 金山香單瓣、白色 楊貴妃千葉、淡紅色 手毬櫻千葉、白色 雪山圓瓣、中、白色

此圖譜の櫻の畫は前記の「浩雪櫻譜」(長者ヶ丸櫻譜)の畫よりも遙に大にして見事なり。圖譜の表紙に「櫻花圖一」とあり。薄墨の粗書なるが恐らくは浩然の筆あるべし。浩然是多數の櫻を寫生したるを以て、此の如き圖譜を更らに續いて作りたるものか、將作らんとしたるものなるか。此圖譜は前記の如く「雪山」にて終れるが、同圖は第二十九枚の裏より第三十枚の表に涉りて描かれ、

其裏に圖なきを以て見れば、此一冊は完結せるものと見るべし。何故に筆者が他の櫻圖の如く畫帖風に描かずして畫本風に寫せるかは明ならざるも、或は上木の爲に作れるや知るべからず。兎に角浩然の櫻畫集中出色あるものあり。

三九

六々櫻譜 (複寫本)

廣瀨花隱 一冊  
原本特許局藏

元日・小・垂枝・手枕・山・香・八重單・路頭・虎尾・芝山・夕榮・三吉野・艶・玉緒・衣笠・曉・八重・地主・爪紅・法輪寺・廊間・玉・伊勢・樺・御園・小翠・鹽竈・曙・漣・筑波根・薄墨・入相・普賢象・淺黃・有明・常磐の三十六櫻花の着色描寫にして、半紙本の一頁に一種づゝ畫けり。筆者の名なきも、其描法にありて廣瀨花隱の作なること明なり。六々櫻譜には不忍文庫・阿波國文庫の印ありて屋代弘賢の藏書たりしものなり。蓋し弘賢が櫻品考證の資料として描かしたるものなるべきは、六々櫻譜と題せる表紙の文字并に一々の櫻の名を記せる文字が同人の筆に疑なければなり。



花隠の描ける櫻譜にして、坂本浩然の櫻譜と共に増田金太郎（繁亭）の舊藏にかゝり、今は南葵文庫に藏せらるゝものあり。此「花隠櫻譜」にも三十六種の櫻を描寫したるが、内容は「六々櫻譜」と大同小異なり。今兩者を比較するに、「六々櫻譜」にありて「花隠櫻譜」になきものは小翠・路頭・廊間の三種あり。又「花隠櫻譜」にありて「六々櫻譜」になきものは愛耶・開終の二種なるが、尙「花隠櫻譜」には尙八重單の圖二あり。

「花隠櫻譜」には一々の所在を記したれば、茲に參考として載すべし。

- |      |             |      |              |
|------|-------------|------|--------------|
| 元日   | 三種 薩州鹿兒島    | 瓜紅   | 二種 洛東高臺寺中月眞院 |
| 勅銘常磐 | 四種 勢州白子浦觀音寺 | 八重   | 二種 南部一乘院宮    |
| 勅銘玉  | 三種 城州醍醐櫻之坊  | 愛耶   | 二種 河州藤坂明尾寺   |
| 開終   | 三種 江都谷中丁支寺  | 山    | 十一種 和州吉野山    |
| 淺黃   | 五種 洛西仁和寺宮   | 勅銘曙  | 三種 洛鞍馬口閑臥庵   |
| 漣    | 二種 洛東華頂山    | 勅銘御園 | 二種 南部興福寺     |

- |       |             |     |              |
|-------|-------------|-----|--------------|
| 玉緒    | 五種 洛西仁和寺宮   | 勅銘曉 | 四種 洞中        |
| 艶     | 二種 江都       | 小   | 十種 洛東長樂寺     |
| 勅銘法輪寺 | 洛西嵯峨法輪寺     | 樺   | 四種 江州日野上郷藏王社 |
| 衣笠    | 二種 洛北衣笠山    | 入相  | 二種 攝州小曾部金龍寺  |
| 手枕    | 五種 和州吉野吉水院  | 地主  | 二種 洛東清水寺     |
| 垂枝    | 十種 洛東華頂山    | 芝山  | 三種 世上一般      |
| 普賢象   | 三種 洛千本閻魔堂   | 有明  | 四種 攝州有馬山     |
| 香     | 五種 泉州堺天王寺   | 鹽竈  | 三種 奥州千賀浦鹽竈明神 |
| 筑波根   | 六種 常州櫻州     | 伊勢  | 二種 攝州小曾部伊勢寺  |
| 薄墨    | 二種 豫州和氣西方寺  | 夕榮  | 三種 野州日光山     |
| 虎尾    | 八種 和州芳野如意輪谷 | 八重單 | 八種 相州鎌倉桐ヶ谷   |
| 勅銘三吉野 | 二種 禁中       | 八重單 |              |

「花隠櫻譜」は筆者が七十一歳の時の作にして、圖は大約二寸五分乃至三寸四方



の大きあり。「六々櫻譜」の圖は之よりも大きく、長さ凡そ四寸乃至五寸五分、幅四寸乃至五寸なり。兩櫻譜の圖柄の一致せざる所より見れば、一方を他方より摸倣したるものに非ざるは明なり。蓋し筆者が多數の櫻の寫生畫中より著しきもの三十六を擇みて更に描寫したるものならん。すべて花隱の櫻畫は花顛の法に據れるものにして、正確寫生を主とせざる代りに頗る古雅なり。櫻の葉脈は概ね五六本を畫き、瓣の重ねれる處は其儘繪の具を重ねたり。又花隱の櫻畫の特色として、枝の本の折口を急に曲げて跳ねたるもの多し。斯かる描方は同人の描ける諸他の櫻畫にも現はれたり。書も亦巧にして、「花隱櫻譜」の一々の櫻の名及所在を記せる文字の如きは雅致に富めり。

四〇 櫻 譜 (複寫本)

坂本浩然畫 二册  
原本入山氏藏

櫻の品種百一を描けり。圖の大きは約横五寸、豎四寸なり。此中約四十種は現存に屬す。

四一 叢 譜 (複寫本)

堀 良山序文 一册  
文 久元年

櫻の品種約二百五十を描けり。其中約六十種は現存に屬す。此櫻譜は前にも記せる如く悉く市橋長昭の「櫻譜」より取れるものなるが、何故にや良山の序文に其事を記せず。良山は信州須坂の城主より。

四二 浴恩園櫻譜 (複寫本)

原本松平子爵家藏 一册

白河樂翁公の別業たる浴恩園に植ゑられたる櫻の品種百二十四を描けるものにして、終に文政五年樂翁公自筆の跋あり。畫家の名は明かならざるも、蓋し文晁又は其門人の描けるものならむか。圖は稍圖案なるも頗る美麗なり。原本は卷物なるが此複寫本は折本となせり。此櫻譜に描ける櫻の中約三十四種は現存せり。



四三 櫻花叢 (複寫本の一部)

原本南葵文庫藏 一冊

圖の描き方は概ね美術的竝に圖案のなり。又同名の櫻にして花の頗る異なるもの多し。原本は三冊ありて三百十箇の圖を收めたり。

四四 萬象寫眞圖譜 (櫻花の部)

玉蘭齋貞秀畫 元治元年 二冊

阿部樸齋の序あり。浮世繪師玉蘭齋の寫せるものにして、櫻の品種百八を圖し繪本として行れたるものなり。原圖は前に記せる彙譜と同じく元「花譜」より出たり。然れども直に同書より取れるには非ずして、「古今要覽稿」の櫻の部より轉寫せるものなるべし。

四五 好古類纂園藝部類 卷二

武田醉霞 明治三十五年、三十六年 一冊

櫻の種類に就き古書に據り記載したるものにして、十七種を彩色して出り。

四六 群芳圖譜 第一輯第八編

和田英作 和藤醇吉 大正九年 一冊

最後の二圖の外すべて彙譜の圖あり。

染井吉野・薄紅櫻・關山・松月・楊貴妃の五種の寫生圖併に山櫻及松月の花部の形態を描ける圖と併せて六枚を載せ、之に櫻の概説殊に文學上より見たる櫻の記述を添へたり。

四七 ヒマラヤ櫻の圖 (複寫)

フォーリッチ氏原圖 一枚  
ゲージ氏寫

ヒマラヤ山腹約四五千尺の森林に生ずるヒマラヤ櫻の圖にしてフォーリッチ氏の「珍稀亞細亞植物志」(Plantae asiaticae rariores) に載せたもの、複寫なり。此櫻には花の色の濃淡不同なるものあり。爰に現はせるものは其一の天然變種と見るべし。

本圖はカルカッタ植物園長「ドクトル」ゲージ氏の寫して三好學に贈れるものな



り。

三 繪畫

四八 櫻の圖

櫻戸玉緒、玉 三熊露香、織田瑟々等 一 折

櫻戸玉緒及び其女玉琴等の種々の櫻の圖、三熊露香枝垂櫻の圖、織田瑟々桐ヶ谷の寫生圖等を收めたり。

四九 吉野山櫻及伊勢櫻圖 扇面

櫻戸玉緒筆 一幅

上記の櫻の着色畫に自作の和歌

えひすくさからなてしこはしらねとも

日本こゝろの花そこのはな

を添へたるものなり。

五〇 薄墨櫻の圖

廣瀬花隱筆 一幅

薄墨櫻を寫し之に和歌を添へたり。

五一 八重一重櫻の圖

廣瀬花隱筆 一幅

八重一重の櫻は御車還の櫻にして、之にも和歌を添へたり。

五二 伊勢櫻圖

廣瀬花隱筆 一幅

伊勢櫻は古來名高き櫻なり。

五三 便殿櫻圖

織田瑟々筆 一幅

織田瑟々女は三熊露香の門人にして、櫻畫を能くせり。近江の人なり、櫻の品種を多く描けり。



便殿は淡紅花の里櫻にして、今日も此品種遺存せり。

五四 桐谷圖

織田瑟々筆 一幅

桐ヶ谷は八重一重とも云ひ、又御車還とも稱せられ、美しき櫻にして昔より知られたり。

五五 逆手櫻圖

織田瑟々筆 一幅

逆手櫻は昔より知られたる櫻なり。

五六 突羽子櫻圖

守田輝女筆 一幅

守田輝女は櫻畫を織田瑟々に學べりと云ふ。

突羽子櫻は昔の櫻譜に載せたり。

五七 山櫻圖

跡見玉枝筆 一幅

山櫻の木振・若葉・花の特徴を現はせり。

五八 絲櫻の圖

藤島清漣筆 一幅

白枝垂櫻を描けるものなり。

五九 櫻の圖

飯島光蛾筆 一幅

里櫻の一種を描けるものなり。

六〇 文珠櫻の圖

伊藤直應筆 一幅

文珠櫻は普賢象に類するも、花心よりして葉化雌蕊の出でざるを異なりとす。此圖は雨中の有様を寫せるものなり。

六一 觀花の圖

木村武山筆 一幅



山櫻の下に平安朝時代の花見の風俗を描けるものなり。

六二 雨櫻帖

文晁、紹真、南湖  
等 版 本 一 折

文晁其他の畫家が雨中の櫻を寫せる圖を集めたるものなり。

六三 櫻百趣

近代畫家筆  
寫 真 版 筆 一 册

現代の畫家の櫻に関する繪畫百趣を集めたるものなり。

六四 百櫻畫集

近代畫家筆  
寫 真 版 筆 一 册

前者と同じく櫻に関する現代畫百趣の畫集なり。

六五 みくにの花の香

跡見玉枝  
大正九年 一 册

筆者の還曆紀念出版にして、大正九年十一月七日東京九段偕行社に於て其自作

櫻畫五十餘品を展覽に供せるものを集め「コロタイプ」に印刷したり。首に三條梨堂公筆跡、櫻戸玉緒筆の櫻の描寫眞圖及櫻の和歌短冊の寫眞畫とを載せ、且筆者の寫眞肖像を掲げたり。卷末には筆者の年譜、還曆櫻花紀念會日の紀念寫眞、祝辭、筆者の跋、明治十三年より大正三年まで調査したる櫻花目錄（三百六十九點）を添へたり。筆者は櫻戸玉緒の門人にして、三熊花顔の櫻畫の系統を今日に傳へたる畫家なり。

六六 八ヤ隔エ櫻

「花鳥圖會」中ノ一

北尾政美  
文化二年 一 册

里櫻の一種を描けるものなり。

六七 櫻の圖

江戸名物詩初編

坂本浩雪  
天保七年 一 册

櫻の圖を描き、之に松嵐の題詞あり。



四 墨 跡

六八 上巳觀花園

林鶯峰(春齋)筆 一幅

巳辰遊步弄春華、淡者如波濃者霞、孰與流觴臨曲水、桃花佳節讓櫻花  
落款に林學士とあり。鶯峰の弘文院學士となれるは寛文三年なれば、此詩はそ  
れより後に書せるものなるべし。鶯峰は羅山の第三子にして、元和四年に生れ、  
延寶八年歿せり。壽六十三、本朝通鑑、鶯峰文集等の著あり。

六九 忍岡懷古詩

大田南畝筆 一幅

弘文學士古丘墟、曾管芳春著一書、今日櫻峰名不辨、等閑觀過醉歸餘  
林春齋種櫻于忍岡別墅名櫻峰著管春錄

七〇 花の歌入消息

小堀遠州筆 一幅

木下長嘯子(文面に東山公とあり)に贈れる消息にして、其中に  
こゝろある人に見せばや山ざとのおのづからなるはなのけしきを  
の歌あり。遠州は有名の茶道家にして、三代將軍家光に仕へ、能書を以て名あ  
り。

七一 垂絲櫻詩

大田南畝筆 一幅

詩は左の如し。

春日遊淨榮精舍看垂絲櫻棠得齊  
偶尋精舍到城西、一樹千絲拂地低、沈醉還疑遊樂國、不言何必羨花蹊、  
七重欄楯羅網密、十里烟霞錦障齊、明日縱逢風雨起、莫令山履踏爲泥、  
淨榮寺は市ヶ谷藥王寺町にあり。眞宗の寺院なり。

七二 花の狂歌 扇面

大田南畝筆 一



いたづらにすぐる月日も面白し花見てばかりくらされぬ世は  
とあり。此歌は蜀山人の狂歌を集めたる南畝帖にも載せたり。

七三 花の歌

石川依平筆 一冊

はるの日の長きを時と開そめしかみ世うれしきやまざくらかな  
とあり。筆者は遠江の人にして、寛政三年に生れ、安政三年歿せり。歌學者と  
して名あり。

七四 花三十首

關根江山筆 一冊

櫻に関する和歌三十首を書せるものなり。筆者は天保頃の人にして、歌を能く  
し又書に巧なり。

七五 詠櫻花長歌

加茂直兄 一幅

我やとの庭のさくら木昨日までうす紅に若葉やゝさし匂ひつゝしら露の玉と見  
るまで花はまた含みたりしか吳竹の一夜の程に初雪の積れる如く梢にもあまる  
斗に咲みちて匂へる色は山端に霞みて残る有明のかけも及はず若竹の少女かま  
みの薫りにもなそへかたきをひと嵐吹たちぬれは遣水の流に浮ひ松の葉にこ  
ほれかゝりてちりゝに散ぬるも亦うつ蟬の世に類なき花にもある哉  
とあり。

七六 櫻の圖並讚

千種有巧筆 一幅

風前の山櫻の圖を描き下に左の和歌を書きたるものなり。

我國のみつのはからにひとくさを  
そへてめつるはさくらなりけり

七七 曉花

岩瀬京山 一幅



山のはもほのみえそめて雲とみし  
花よりしらむ春のあけほの  
とあり。京山は京傳の弟なり。

八十七歳 京山

七八 名所花

菅原桃花園 一幅

塵ひとつなきいにしへは三吉野も  
はなや積りて山と成けむ  
筆者は蜀山門人なり。

七九 櫻の長歌並短歌

一柳千古筆 一幅

筆者は千蔭の門人なり。

八〇 櫻の歌 短冊

櫻戸玉緒筆 一枚

うへだぢうこのきみよりおくりこされしさくらばなの  
いまはうつろはんとするを見て  
うつりゆくはなのすがたをかごとにてをしむはきみがむかしなりけり  
とあり。筆者は宮崎姓にして、明治時代に於て櫻の品種を多く描き別け、作品  
世に少からず。又多く櫻の歌を詠めり。

八一 櫻の句 短冊

關 爲山筆 一枚

まつことのひとつ過けり初さくら  
とあり。筆者は幕末より明治の初年にかけて名ある俳人なり。此短冊は明治十  
年の筆なり。

七十六翁 爲山

八二 櫻の句 短冊

みき雄筆 一枚

初花の噂一日に古びけり



とあり。

八三 香櫻の歌並に手簡

中村秋香筆 一幅

やまさくらひとへにかせをいとひしはかをしらぬまのころなりけれ  
筆者は遠江の人にして、歌學に通じ御歌所の寄人となれり。天保十二年生、明治四十三年歿せり。此歌は去る明治三十五年頃三好學が香櫻の枝を送れる時に詠みて贈られたるものにして、「秋香集」に載せたり。  
此自詠の歌の外に、筆者が櫻の花の香を詠める古歌を選出して自書し、三好學に送れるもの並に其時の手簡を載せたり。

八四 櫻桃詩

星池馨書 一幅  
文晁文一畫

花飛蝶駭の陸龜蒙の詩を書し、蝶を畫き添へたるものなり。

五 雜說

八五 櫻精傳奇

是亦道人 二册  
天保元年

櫻を美姬に喩へたる漢文小説あり。

八六 櫻史新編

青山延光 一册  
明治十三年

花神、櫻の名所、名花、雜記等の數項に互り漢文を以て古來の史話傳説を記せるものなり。

八七 花は櫻

生田目經德 一册  
明治三十一年

歴史に現はれたる櫻並に著名の櫻、櫻の名所等を記せるものなり。

八八 さくら (園藝之友臨時増刊)

明治三十九年 一册



櫻に關する諸家の説を集録したるものにして、科學上、文學上其他に互れり。

八九 芳 譚 櫻花號

菟道春千代 一册  
明治四十二年

首に宮崎(櫻戸)玉緒筆の櫻花五十種を集め描ける畫幅の三色版圖を掲げ、文中には櫻の傳説、櫻の品種、玉緒の傳其他の記事あり。

九〇 日本魂 櫻花號

大正七年 一册

櫻に關する諸家の談話を集めたるものなり。

九一 櫻 第一號、第二號、第三號、第四號

大正七、八、九、十年 二册  
櫻の會

櫻の會にて發行せる雜誌にして、種々の方面より見たる櫻の記事を以て充たせり。又櫻の寫眞、寫生圖等を載せたり。

九二 新編櫻花集

大竹多氣 一册  
明治二十六年

櫻に關する雜載にして、櫻の歌、詩、狂歌、謠曲等を載せ、又花の傳説、名所等に互つて汎く記せり。

九三 增訂 植物生態美觀

三好學 一册  
大正元年

編中には美觀上より櫻の特徴を述べたる所あり。普賢象の着色圖竝に小金井の富士見櫻の寫眞圖あり。

九四 國 華 (東洋學藝雜誌第三十五卷第四百三十九號別刷)

三好學 一册  
大正七年

國華としての櫻が上古以來觀賞されたる由來を述べ次で櫻の名所、櫻の種類竝に品種に就て略説せり。



九五 科學上より見たる櫻 (櫻第三號)

三好學 一册  
大正九年

植物學上より見たる櫻の種類、分布、來歴等に就て其概要を述べたるものなり。

九六 昔の櫻と今の櫻 (櫻第四號)

三好學 一册  
大正十年

大正九年三月二十八日南葵文庫に於ての講演の速記にして、「櫻の歴史」と「櫻の種類」とに分ちて述べたるものなり。

九七 明治四十五年四月五日南葵文庫に於ける櫻の會出品

目錄

明治四十五年  
南葵文庫 一册

九八 南葵文庫報告 第四

大正元年  
南葵文庫 一册

南葵文庫に於て催されたる櫻の會の出品目錄並に記事を添へたり。

九九 南葵文庫報告 第十二

南葵文庫 一册  
大正九年

大正九年三月廿八月南葵文庫に於て催せる「昔の櫻と今の櫻」と題する三好學の講演の概要を載せたり。

一〇〇

講談落語 花づくし (文藝俱樂部第十九卷第六號)

大正二年 一册

櫻に関する講談並に雜録を載せたものなり。

六 詩歌俳

詩

一〇一

櫻花百絶

中野煥 一册  
天明三年

左近の櫻を始め、各地の名所の櫻並に著名の櫻の七絶百種を載せたものに



して、田岡挺之、源家具の序、中塾孔固竝に藤益根の跋あり。

一〇二 忠芬義芳詩卷

河原寛 二册  
安政六年

大石良雄の植ゑたる櫻に関する諸家の詩を集めたるものにして、首に佐藤一齋の題辭あり、次に大石櫻(垂櫻)の詩竝に故淺野氏老大石君遺愛櫻樹碑の文を載せたり。卷末には學齋、芳野金陵、阪谷素、三島毅、坂井虎山、木原愼齋の跋あり。

一〇三 珮弦齋雜著 名花有聲畫

青山延光 一册  
慶應二年

櫻花に関する詩二百を録せるものにして、青山延壽の序、藤田彪及び廣瀬建の跋あり。

一〇四 佐久間象山櫻賦

石榻 一幅

一〇五 佐久間先生恭聞帖

明治十七年 一折

象山自筆の櫻の賦を刻せるものなり。

一〇六 象山佐久間先生櫻賦附詩

明治十五年 一册

象山の櫻の賦に漢文の解釋を加へたるものにして、象山の男格の作れるものなり。

一〇七 櫻賦解釋

柄澤義郎 一册  
明治二十九年

首に象山の櫻賦を載せ、次に緒言として問答體に櫻賦の大體を説き、それより一々の辭句を解説せるものなり。

一〇八 飛鳥山みやげ 佐久間象山櫻賦解

高橋陳 一册  
大正八年



飛鳥山に建てる象山の櫻賦の碑文の解説なり。

一〇九 櫻百首

那須龍洲 一册  
明治三十九年

櫻に關する詩歌各百を集めたるものにして、其中に名所の櫻少からず。小野湖山、東久世通禧其他の題辭序文等あり。

一一〇 櫻花の歌

片岡茂 一枚  
明治三十九年

櫻花の長詩並に其譯詩(和歌體に綴れるもの)を載せたり。

一一一 詩聖堂詩話

窪詩佛 一册  
政十一年

卷首に櫻に關する詩話二節を載せ、平城天皇の御製以下古人の櫻詩を擧げたり。

和歌

一一二 まくらの山 櫻花三百首

本居宣長 一册  
享和二年

著者が寛政十二年の秋に詠める櫻の和歌三百首を集めたるものにして、終に著者の文あり。此中には有名なる「敷島の和歌心」の歌は無し。此歌は寛政年に詠みたるものなり。

一一三 歌塚の歌

冷泉爲村 一册  
安永二年

大和國添上郡沿道の柿下寺に和歌を奉納せる時に人々の詠める花の歌三十首を集め、著者の自筆せるものを刻したるなり。首に著者の序文あり。

一一四 草根集 (古寫本)

徹書記 一册

此中に櫻の和歌四百八十三首あり。此寫本には「青蓮王府」の藏書印あり。



一一五 花百首詠草

菅沼守敬 二冊

著者並に他の人々の櫻に關する歌六十五首を集めたるものなり。

一一六 玉の枝

沙門映範序 一折

首に一峨の繪を載せ、沙門映範の序あり。人々の詠める花の歌三十三首を載せたり。

一一七

三河國 衣乃里 艶櫻和歌集 初編

自樂庵道貴 一冊

昔、三河の衣の里にありし香櫻に就て詠める歌を集めたるものにして、終に香木昔語りの圖を載せ、又詠歌者の姓名を列擧せり。

一一八 さくら山の歌集

片山高岳 一冊

長州赤間ヶ關の招魂場に植ゑられたる櫻に就て、當時の奇兵隊の人々の和歌を集めたるものなり。

一一九 閑居花

富永準清 一冊

越後頸城の人富永春部の追悼歌集にして、櫻の歌二百五十五首を載せたり。編者の跋と詠者の姓名とを附す。

一二〇 花百首 (稿本)

新居守村 一冊

此花集は「簷の月花」と題せる歌集と合はせて二冊として刊行せり。

一二一 かさしの花

野口正章 一冊

著者の父柿村の七十の賀の爲廣く櫻の歌を募り集めたるものなり。終に壽筵



賀詩、出品目録等を附せり。

一一三 花のうたかた

伊達宗徳 一册  
明治二十六年

侯爵伊達宗城追悼紀念に集めたる花の歌なり。

一一三 さくら百首

藤田徳次郎 一册  
明治三十年

人々の櫻を詠める歌を集めたるものなり。

一二四 昔の春

鎌田憲夫 一册  
明治三十七年

著者の母勇子の追善の爲に詠める櫻の歌を集めたるものなり。

一二五 和歌 櫻花百詠

元田直一 一册  
大正四年

著者の明を失せる後に作れる櫻の歌及詩を集めたるものにして、詠櫻十二首、

名都櫻花四詠、舊都櫻花八詠、名區櫻八詠、東京名櫻八詠、西京名櫻八詠、其他種々の頭目の下に櫻花を詠せるもの多く、前後二編に分かてり。一々の題毎に和歌と詩をも載せたり。

狂歌

一二六 花ぐわし

狂歌堂眞顔選 一折  
北尾重政 寛政年間

四十二の異なる櫻を單彩にて現はし、一々之に諸家の狂歌を添へ、終に名所の櫻の狂歌十餘首あり、眞顔の序と錢屋金持の跋あり。櫻の圖は概ね櫻品より取れり。

一二七 三才花百首

六樹園選 一册  
北溪 畫

六樹園の序、北溪の朝日の櫻、水邊の花、花見の櫻の口畫あり。櫻の狂歌百首を載せたり。



一一二八 狂歌四季遊 花見の部

彌生庵雛群選 一册

花見の狂歌集にして、首に素眞の花見にちなめる畫あり。

一一二九 狂歌畫像鯉鱗集 花之部

檜園梅明選 一册

卷首に大江梅信以下十二人の狂歌作者の畫像を掲げ、作者の住所號等を記し、各々花の狂歌一首づゝを載せ、後に地方の狂歌連の花の狂歌二百八十五首を集めたり。

一一三〇 おも本篇傳

橘樹園選 一册  
北溪畫選  
天保十年

名所の花の來歴と多數の狂歌を載せ、北溪の描ける吉野、隅田川の花見の圖あり。

一一三一 ちもとの華

千首樓選 一折  
文化七年

千首樓の序あり。編中に北尾紅翠齋、辰齋、北畫、雪旦、北馬等の花見の圖あり。櫻に関する狂歌を多く載せたり。

一一三二 得吉方迺瀧

狂歌堂島人選 一册  
天保四年

狂歌堂島人の序あり。櫻と紅葉とを詠める歌數多を載せたり。

一一三三 濤花集

戲吹歌園、戲樹園選 一册  
土佐相覽畫 文政十三年

櫻と春雨との狂歌を多く集めたるものなり。

一一三四 櫻間狂歌集

綠樹園選 一册  
天保九年

阿波國名西郡櫻間の池の畔に碑を建て、古の名所を永く後世に遺さんとせる



同國の太守の美譽を賞揚して、櫻にちなみ作れる狂歌集なり。屋代弘賢、加茂季鷹其他の序あり。又碑石の全形、碑文、櫻間の池の景色圖を載す。

一三五 興歌手向花

嘉永三年 一册

芍薬翁追福會の爲に選める狂歌集にして、獨櫻に限らざれども、櫻の歌五百首に達せり。編中に爲齋の畫あり。

一三六 花街紅叢紫錄

黒川春村、村田文成選  
其一畫 天保六年 一册

櫻に関する狂歌を多く集め、處々に畫を挿めり。

一三七 花櫻狂歌集

三條茂佐彦 一册

櫻の品種の名に就て詠める著者の狂歌集にして、上欄に簡單なる櫻の畫竝に櫻の名に因める畫を掲げたり。

俳句

一三八 櫻花俳卷

享保十二年 一册

訥子・蘭臺・貞佐・沾洲等の花の誹諧連歌三十六韻の外に、花の句二十二を載せたり。首に藤原氏女とみ筆の櫻の畫と沾洲の序あり。又翠竹散人の跋を附す。

一三九 櫻かぐみ 金龍山花王鑑

吉田魚川 一册  
享保十九年

享保年間淺草寺境内に櫻を植ゑたる時の俳句を集めたるものにして、昔より引用せられたる書なり。

一四〇 櫻勸進

石中堂斑象 一册  
寶曆九年

元祿の頃深川八幡社の境内に園女の植ゑたる歌仙櫻の後を繼ぎ、寶曆年間に再び櫻を植ゑたる時の俳句集なり。



一四一 さくら帖玉兔ゆき帖

寛政二年三年 一册

櫻・月・雪の三部に分てり。櫻の部の判者は雪中庵完來、集者は山花人午心にして、寛政二年に成れり。花の句百二十二を載せたり。

一四二 花見次郎

井 寛政十二年 一册

吉野の卷・初瀬の卷・嵐山の卷の三部に分ち、各、俳諧の連歌並に俳句を集め載せたり。獨花の句に限らざるも、櫻にちなみたるもの多し。

一四三 さくら會

文政十一年 一册

嵯峨御影堂奉納の俳句集にして、宗匠として奇淵・天來・梅價、又執筆として昇左の名を載せたり。此書の外に時雨會・枯野會等の同様の句集あり。

一四四 花供養

あ し 丸 一册

芭蕉翁追福の法養を營めるときの花の俳句集なり。

一四五 花の賀

櫻井梅室序 一册

梅室の序文と、八重櫻の口繪あり。俳句は櫻のみに限らず、廣く集めたり。

一四六 花 櫻 (寫本)

一一册

蟹庵の選める櫻の俳句を載せたるものなり。年號なけれども、江戸末期なるべし。

一四七 題花櫻 (寫本)

一册

前書と同時に、櫻の發句の催しを謠曲に作れるものなり。



一四八 華櫻集

教林盟社編 一冊  
明治十年

櫻の俳句集なり。

七名所

吉野

一四九 新葉和歌集 (寫本)

宗良親王 二冊  
弘和元年

南朝の勅選和歌集と見るべきものにして、當時の吉野の櫻に関する和歌少からず。

一五〇 吉野百首

高臺寺藏版 一冊

文祿三年二月二十九日豊太閤の吉野に於て催せる歌の會の櫻の和歌を集めた

るものにして、關白秀次、右大臣晴季、權大納言親綱、權大納言輝資、權大納言秀保、左近衛中將秀家、左近衛中將利家、侍從政宗等の外に法眼紹巴、法眼由己、法橋昌叱等の歌あり。執筆は織田常真にして、各、花のねかひ、花をちらさむ風、瀧の上の風、神の前の花、花の祝ひの五首を詠めり。此書は「續々群書類從」第十四にも收められたり。

一五一 詠二首和歌

里村紹巴筆 一幅

文祿三年豊太閤吉野觀花の時歌の會にて詠める花の歌四題の中の「はなのねがひ」と「たきのうへのはな」との二首を書きたるものにして、「吉野百首」に載せたり。

一五二 芳野新詠

荒井公廉 一冊  
文政四年

吉野に関する著者の詩集にして、其中櫻を詠ぜるものあり。



一五三 芳雲餘情 第一輯

小野 諱三 明治十七年 一册

吉野の古跡並に櫻に就て古今の詩歌を集めたるものなり。附録として吉野山上の碑文を録せり。

一五四 芳山風雅集

吉川 法譽 明治二十一年 一册

吉野に関する近世の詩人の作を集めたるものなり。

一五五 芳野勝咏

井上 華 明治二十五年 一册

吉野に関する著者の詩集にして、其中瀧櫻、布引櫻、雲井櫻等を詠ぜるものあり。

一五六 芳雲餘香集

西涯 主人 明治三十四年 一册

吉野に関する古人の詩、歌を集めたるものなり。

一五七 説南集 上編

辰己 長三郎 大正四年 一册

吉野に関する今人の詩歌を集めたるものなり。

一五八 吉野山櫻の歌の口傳書

北村 季吟筆 一幅

吉野山の櫻の古歌に就ての考證を認めたるものなり。

一五九 花の和歌 短冊

屋代 弘賢筆

花のうたあまたよみける中に

櫻さくいつくはあれどみよし野の

よしのや春の都なるらむ

とあり。



一六〇 花の和歌 短冊

行誠上人筆 一枚

ふるさと、誰かいふらんみよしの、

よしのは花の都なりけり

行誠姓は福田、武藏の人、東京小石川傳通院、芝増上寺の僧正となり、次で京都知恩院の門主となる。明治二十一年寂す、壽八十三、和歌に巧なり。

一六一 吉野天人 (謠曲本)

一冊

吉野の花に関する謠曲なり。

一六二 芳山紀行 (寫本)

中井竹山 寶曆十三年 一冊

著者の吉野花見の紀行なり。竹山は享保十五年に生れ文化元年歿せり、享年七十五。此紀行は竹山の詩文を集めたる「奠陰集」にも載せず。文中に癸未と

あるは寶曆十三年にして、竹山三十四歳の時なり。一行六人三月三日大坂を發し途中一泊、翌五日吉野に達せるに、恰も一目千本の花盛なり。滯留二日、史蹟を探り風景を賞し、八日塔の峰を過ぎ、奈良に至り、九日大坂に還れり。一行皆酒客なりしといへば、酣飲談笑の快想ふべし。著者が此文中に於て櫻を海棠となせるは、昔時の漢學者に普通なる謬見にして深く咎むるに足らず。此誤謬を正せる儒家には竹山の門人たる佐藤一齋あり。市橋星峰撰「花譜」の跋に於て之を説けり。世に和學者の作れる吉野日記の類は少からざれども、漢學者の筆に成れるものは稀なり。況んや一代の儒宗竹山其人の著に於てをや、管に文墨の珍として世に傳ふべきのみならず、又當時の吉野の考證となすべし。

一六三 菅笠日記

本居宣長 一一冊

明和九年に著者が吉野の花見に赴ける時の日記なり。



一六四 餌袋日記

本居 太平 一册  
嘉永 七年

明治九年著者が父宣長に随ひ吉野に花見を爲せるときの日記にして、著者十七歳の時なり。出雲宿稱尊澄の序、著者の嗣内遠の跋あり。

一六五 吉野葉 (寫本)

三熊 花 顛 一册  
寛政 十三年版

寛政頃の櫻の愛護者且寫生家たりし三熊花顛の吉野花見の紀行にて、當時に於ける同地の櫻の有様を知るを得べし。

一六六 よしの紀行

嘉 栗 一册

嘉栗と従者九郎の二人にて吉野の花見に行きたる紀行なり。文中に二人の狂歌を載す。

活字本にして、卷首に本書の原稿一枚を寫真版として載せたり。

一六七 盛の花の日記

竹村 尙 規 一册  
享和 元年

著者は本居宣長の門人にて、吉野の花見の日記なり。

一六八 芳野道の記

松花 堂 一册  
寛政 五年

松花堂が江月和尙を伴ひ吉野に赴ける時の紀行文を橋千蔭が模書し、之を白字に刻せるものなり。

一六九 芳野紀行

村瀬 美 一册  
明治 二十年

著者の吉野紀行にして、漢文にて作れる所と和文にて作れる所とあり。文中に圖を挿めり。

一七〇 芳野記 (寫本)

飛鳥井 雅章 一册  
高田與清 舊藏



著者の吉野紀行にして、文中に和歌多し。上欄には註釋を加へたり。

一七一 芳野日記

氷室長翁 一册  
嘉永元年

吉野花見の紀行なり。卷首には大和國藥師寺にある舍人親王眞蹟を刻せるものを載せたり。

一七二 折々草

春の部 吉野山をいふ條 大田南畝自筆寫本 一册

此書は建部涼袋の漫筆にして、春夏秋冬の四冊より成る。享和二年の作にして、從來寫本として傳はり、杏花園(蜀山人)の奥書あり。此寫本は右の書の春の部のみにて、卷末に享和二年神無月二十七日より二十九日までに寫すとあれば、同書の成れる時直に寫し取れるものならん。書中に「吉野山をいふ條」とある所に、吉野の櫻苗賣に関する記事あり。此事は前に記せる三熊花顛の「吉野菜」に載せてあり、參照すべし。

一七三 芳野山獨案内 (翻刻本)

謠文 春庵 三册  
寛文十一年

古地誌の一にして、吉野の名所を記せる最も古きものなり。和歌多し。櫻に関する記事少からず。編中に古雅なる繪を挿めり。

一七四 大和めぐりの記

貝原益軒 一册  
元祿九年

編中に吉野の櫻に就て著者の觀たる所を記せり。元祿の當時に於ける同所の櫻の有様を知るを得べし。

一七五 和州吉野山勝景圖

貝原益軒 一折  
正徳三年

吉野山の麓六田の渡より奥千本に至るまでの山上の有様を寫せる圖にして、一々手にて彩色したるものなり。著者の序あり。圖の後に吉野山名所考の一編を添へたり。



一七六 芳野詣路乃枝折

梅亭金魚 一册  
嘉永三年

大坂より吉野に至るまでの路筋を道中記風に記せるものにして、諸所に繪あり。初に三吉野の春景と題せる彩色の繪を載せたり。

一七七 芳山花葉

曉鐘 一折  
嘉永二年

京都より大和めぐりの道中を案内記風に記せるものにして、殊に吉野に至る諸道を精しく擧げたり。又吉野山一眸圖を掲げ、一目千本より山上の櫻花の所在を示し、又詩歌を添へたり。次に芳山花時考と題して、古來吉野に來れる著名の人々の遭遇したる花の盛、早、遅の實例を一々擧げたり。

一七八 吉野山勝景繪圖

平井佐一郎 一枚  
明治九年

小さき勝景圖にし櫻の所在を示せり。

一七九 吉野名所記

平井賣花翁 一册  
明治二十年

吉野の花候竝に名所舊蹟等の沿革を記載し、且大和の所々より吉野へ至る道路を記せり。前記の芳山花葉より取れるもの多し。

一八〇 よしの名所誌 (第六版)

青涯主人 一册  
明治三十六年

吉野山の名所を古書等より抄記せるものなり。

一八一 吉野精華 (第二版)

水木要太郎 一册  
大正四年

是も吉野の案内記にして、前者と大同小異なり。

一八二 吉野名所誌 (第四版)

中岡清一 一册  
大正六年

吉野山中の名所の案内記なり。終に豊太閣吉野山登嶺記の一篇を載せたり。



一八三 芳野山

大宮 正 六年 青葉 一 冊

主として吉野の史蹟を記せるものなり。

一八四 吉野郡名勝寫真帖

奈良縣吉野郡役所 大正 六年 一 冊

吉野郡中の名勝を寫せるものにして、畫の數四十五あり。

一八五 吉野山寫真帖 (第二版)

中岡 正 七年 一 冊

吉野の山下より奥千本西行庵に至るまでの寫真圖總計二十一を載せたり。其中櫻の風景を寫せるものあり。

一八六 芭蕉繪詞傳 中

蝶 寬政 五年 夢 一 冊

吉野の一目千本の圖を載せたり。狩野正榮至信の原圖に基けり。

一八七 俳家奇人談 卷之上

玄 文化 十三年 一 冊

貞室の「これはく／＼とばかり花の吉野山」の句の意を現はせる圖あり。鍬形紹眞の筆なり。

櫻川竝雨引山

一八八 櫻川事蹟考

石倉 重 明治 二十八年 一 冊

櫻川の來歴に就ての考證、櫻川の名所及び櫻川に関する和歌を載せたり。

一八九 櫻川顯揚滿二十年記念句集

花 笠 大正 二年 一 冊

昔の名所たりし櫻川の永く湮滅に附せられたるを慨し、之を顯揚せむが爲に著せるものにして、櫻川に関する諸家の談話、筆蹟、俳句等を載せたるものなり。



一九〇 櫻川觀櫻紀念寫眞

二十四枚

大正元年徳川頼倫侯一行の櫻川觀櫻紀念の寫眞なり。

一九一 櫻川眞景繪葉書

一組

前記の紀念寫眞の一部を繪葉書に製したるものなり。

一九二 櫻川觀花寫眞

二枚

大正二年徳川達孝伯一行の櫻川觀櫻紀念の寫眞なり。

一九三 櫻川 (謠曲本)

一冊

古き櫻の名所としての櫻川の謠曲本なり。

一九四 雨引山樂法寺眞景

一枚

坂東の札所たる同山の圖なり。山中に美麗なる山櫻多し。

一九五 妙智力 第三十號

大正二年 一冊

雨引山の櫻に就ての記事あり。

嵐山嵯峨東山等

一九六 嵐山風雅集

仁科白谷 天保十年 一冊

卷首に嵐山春景の圖を掲げ、次で著者の序文と、其遊嵐山記の一篇あり。冊中の詩は、平城天皇の御製を始め、菅原道眞、大江匡衡よりして近世に至るまでの作を集めたるものにして、此中嵐山の櫻に関するもの甚だ多し。

一九七 嵐山百題花

弘化三年 賀茂直兄 一冊

嵐山の四季の花其他に就ての和歌を集めたるものにして、此中櫻を詠ぜるも



の二百餘首あり。卷首に嵐山の風景圖を載せたり。

一九八 都花月名所

秋里 寛政五年夕 一册

京都並に其附近の雪月花の名所を案内せるものにして、其中花の名所は御室、嵐山、華頂山、醍醐、花寺、鞍馬等を挙げたり。處々に圖を挿めり。

一九九 都花見往來

弘化五年一枚

京都の花の名所を往來文風に綴れるものにして、一々の名所に就て花の盛りの日限を朱字にて現せり。表紙の袋には京都の歳時記を載せたり。

二〇〇 嵯峨嵐山之圖

一枚

嵐山満花の全景を寫せる圖にして、上は大慈閣、下は渡月橋までの兩岸の名所を記せり。

二〇一 嵯峨の日ぐらし (古寫本)

冷泉爲村 一册

著者の嵯峨の花見の記にして、未だ出版せられたるを聞かず。文中には和歌多く、又法輪寺の櫻を記せる所あり。

二〇二 花見日記 (寫本)

著者自筆本 常阿道筑 一册

嵐山の櫻に就て作れる雅文にして、和歌多し。櫻の外に杜鵑、月、雪に就ても述べたり。

二〇三 妙法院宮嵯峨御遊覽記 (古寫本)

伴蒿蹊 寛政二年寫 一册

此篇は伴蒿蹊が妙法院宮一品親王(眞仁法親王、明和五年御誕生、文化二年寂)に供奉して嵐山の花を見たる時の紀行なり。文中に小澤蘆庵の歌も見えたり。文句は蒿蹊著「閑田文章」(享和三年版)卷の三、十七枚裏にある「某



宮嵯峨御遊覽記」と題せる一篇と大方同じと雖も、同文中には本文にある如き多くの詩歌無し。想ふに本文は蒿蹊の初の作にて、後に文句を改め「文章」中に収めたるものならむか。

本文の首には嵐山の渡月橋附近の著色圖を載せたり。

二〇四 嵐山花見の記 (活字本) 熊谷直好 一册

「嵐山花見の記」は、著者と阿元と二人が西山の花を見に行けるときの紀行にて文中に二人の和歌數多あり。文化六年三月の稿なり。此紀行の後に「花のあと」の一篇あり。著者が四月九日に佛光寺上人に従ひて香川景樹其他の人々と嵯峨に赴けるときの記なり。文中歌多し。

著者は景樹の門人にして、國家者なり。天明二年生、文久二年歿せり。周防の人。

二〇五 東山の花 雛屋立圃 一幅

東山の櫻に就ての句を書きたるものなり。

二〇六 醍醐の櫻繪葉書 一組

下醍醐三寶院の寺中の櫻の寫真圖なり。

二〇七 御室山内 四國順拜所細見圖 一枚

京都御室仁和寺境内の圖にして、多數の櫻の所在を示せり。

二〇八 嵯峨野の風景 廣重 國畫 三枚續

廣重の嵐山の櫻の遠景圖に豊國の人物を添へたるものなり。

隅田川

二〇九 隅田川櫻百首 文中 久田顯忠 一册

名所(隅田川)



隅田川の櫻を詠みたる歌百首を加藤千浪の書したるものなり。著者の序文あり。

二一〇 墨水看花詩冊

植村 蘆洲 一冊  
明治四年

隅田の花に就ての諸家の詩を録せるものにして、大沼枕山の題辭あり。

二一一 隅田川叢誌

矢掛 弓雄 一冊  
明治二十五年

隅田川に關する一般の名所を記せるものなるが、其中隅田の櫻に就ての沿革を記せる所あり。

二一二 墨水流燈會之記

言問 主人 一冊  
明治二十年

隅田川の流燈會の記事なれども、卷末に墨堤植櫻之碑の一篇を載せたり。

二二三 隅田川堤櫻詩

石榻

龜田 鵬齋 一幅

長堤十里白無痕、訝似澄江其月渾、飛蝶還迷三月雪、香風吹度水晶村、の一絶を楷書にて認めたるものなり。

二二四 隅田川櫻の歌

加藤 千蔭筆 一折

「あらたまのとし立しより」の長歌竝に反歌二首を書せるものなり。

二二五 墨堤の夜櫻

染井吉野

鈴木 華邨筆 一幅

墨堤の百本杭附近に染井吉野の満開せる夜景を描けるものなり。

上野

二二六 花待ころ

(寫本)

作樂園主人 一冊



上野の花見の記なり。

小金井

二二七 小金井櫻樹碑文

一枚

小金井橋の傍に建てられたる碑文の摺本にして、挾南膝忠休明夫識、犀淵上條游子藝書、肥前守藤原義行朝臣題額とあり。元文の昔土地の奉行川崎平右衛門が幕命に依りて水道の兩側に櫻樹を植ゑたる來歴を記したるものなり。

二二八 同上 縮刻

一枚

前記の碑文を縮寫して彫刻したるものなり。

二二九 王花勝覽

露庵有佐 一册  
文化元年

内藤新宿邊より小金井に至るまでの順路を現はしたる圖竝に途中の名所等を

記したるものなり。

二三〇 小金井紀行 (寫本)

文化五年 一册

文化五年數名の俳人の小金井の花見に赴ける紀行なり。路すがら柏木の右衛門櫻を尋ね、今は朽木となりて無しと記せり。文中に俳句多し。終に「品川紀行」「道の記」の二篇を添へたり。

二三一 遺愛花

文化八年 一册

首に小金井の櫻の碑文と小金井橋の附近の櫻の圖を掲げ、小金井の櫻に關する諸家の詩を載せたり。其他櫻の俳句等あり。

二三二 夢路の花 (寫本)

文化十二年 一册

小金井の花見の紀行にして、和歌を挿めり。華者は南柯の痴樵とありて、何



人なるや明ならず。此紀行の外に「磯邊の梅」(杉田)、「桃の錦」(越ヶ谷)と題して、梅見・桃見の紀行を添へたり。桃見の記事には司直の句あり、成島司直ならんか。

二二三 西郊紀行 (稿本)

原 德 齋  
文 政 二 年 一 册

德齋は志賀理齋の子にして、原念齋の養子となれり。此紀行は著者十七歳の時生父母と共に小金井に櫻を観たるときの作にして、著者の自筆なり。

二二四 東京近郊圖

中 田 惟 善  
文 政 八 年 一 枚

圖中に小金井の櫻並木の所在を示せり。

二二五 武藏野小金井櫻順道繪圖

庭 田 敬 之  
明 治 十 八 年 一 枚

東京より小金井に至る順路を示す繪圖なり。小金井の櫻の碑文、櫻を植うる

記、其他櫻に関する俳句等載せたり。

二二六 愛日樓文集

佐 藤 一 齋  
文 政 十 二 年 一 册

編中に著者の「小金井橋觀櫻記」の一篇あり。是れ文化三年一齋が林大學頭と共に小金井觀櫻の時の紀行文なり。

二二七 小金井保櫻會々則

大 正 三 年 一 枚

大正三年四月設立せる小金井保櫻會の會則竝に役員名及び小金井に至る案内を記せり。

二二八 東京市公報 第八十六號

一 册

小金井の櫻花の沿革竝に其優れたる品種、櫻の保護に関する東京市の事業を略記せり。



二二九 小金井の櫻の歌二首 加藤千蔭筆 一幅

けふゆきてわけなむ花のあらましに先あり明の月そにほへる  
開わたる天のかはらかさく花の雪の中ゆく水のひとすち  
の歌を書せり。

二三〇 日の出の櫻寫眞 三好學撮影 一枚

小金井の櫻の中にて最壯觀なる日の出の櫻の満開の有様を寫せるものなり。

二三一 小金井觀櫻紀念寫眞 四枚

大正三年四月小金井觀櫻の紀念として撮影せるものなり。

二三二 小金井の櫻 「富士見百圖」中の一圖 廣重筆 一冊

小金井の櫻の並木の遠望圖なり。

二三三 同 三十六花撰中の一圖 立祥筆 一冊

一株の山櫻を描けり。

荒川 (江北)

二三四 照代樂事 清水謙吾 一冊

明治十九年東京府南足立郡江北村の荒川堤防に里櫻の品種七十九種を植ゑたる時の記事並に之に關する詩文歌等を載せたるものなり。著者は同村の人に於て、該堤防に里櫻の名稱を植ゑたるは一に同氏の計畫に由れり。

二三五 荒川堤櫻花曆附觀櫻道案内 高木興吉 一枚

荒川堤に植ゑられたる里櫻の品種の名稱並に其特徴を記し、又同所の略地

名所(荒川)



を附せり。

二三六 江北荒川堤五色櫻繪葉書

一組

荒川の櫻には花の色の種々なるものあるにより、俗に五色の櫻といへり。

二三七 江北荒川堤上の櫻の寫眞

二十二枚

江北堤上に植ゑたる里櫻の品種の樹形竝に花形の寫眞なり。

其他の名所

二三八 甲州山高實相寺の神代櫻の圖 銅版

一枚

神代櫻は本邦第一の巨大なる櫻として知られたるものなり。此圖は實相寺の境内竝に其櫻を銅版に刻せるものにして、且櫻に關する記事を載せたり。

二三九 同上繪畫 「甲山峽水」中の一圖

山梨縣廳  
明治三十九年

一冊

右の櫻の満開せる有様竝に實相寺の門及び背景としての高山を木版着色畫として現せるものなり。

二四〇 同上寫眞

一組

實相寺の櫻を種々の方面より寫せるのなり。

二四一 同上繪葉書

一枚

二四二 駿州狩宿の頼朝下馬櫻

井出正春  
大正六年 一幅

狩宿の櫻は山櫻の最も巨大なるものにして、頼朝の下馬櫻として著名なり。此圖は此櫻の立てる傍にある舊家井出正春氏の作れるものにして、樹の大きさを記し、又和歌を載せたり。

二四三 同上寫眞

一組



下馬櫻を種々の方面より寫せるものなり。

二四四 武州石戸の蒲櫻の圖

荒木探玉喜信 一枚  
明治二十一年

埼玉縣石戸の蒲櫻は蒲の冠者範頼の紀念に植ゑたるものとして知られたり。此圖は蒲櫻の全景を示し且之に關する記事あり。

二四五 矢立の墨 乾

大橋義三 一冊  
明治三十九年

編中に蒲櫻の略圖と、其記事あり。

二四六 玄同放言

瀧澤馬琴 一冊

編中に蒲櫻の詳細なる記事あり。華山の作れる圖を載せたり。

二四七 時雨の櫻の圖

月輪寺 一枚刷

京都府下葛野郡かどの嵯峨村愛宕山月輪寺の時雨の櫻の柵内に樹てる有様を描寫したる略圖にして、「法然上人親鸞聖人流され給ふとき殿下兼實公手づから植給ふ櫻なりされば櫻も御名残をおしみ露の落ること時雨の如くなればしくれの櫻と號給ふ云々」と記せり。

二四八 花之十文

橘樹圖 一冊

名所の櫻の來歴並に之に關する狂歌を多く載せ、且北齋、北溪の圖を挿めり。前に載せたる「おも本篇傳」の著者と同人なり。

二四九 花迺家苞

半井忠見 一冊  
明治十一年

著者が伊豫今治より嵐山・吉野等の花見に趣けるときの日記にして、和歌を挿めり。



二五〇 美濃根尾谷の薄墨櫻の圖 一枚

巨大なる白彼岸櫻の寫真圖なり。

二五一 霞間ヶ谷の櫻(史蹟名勝天然紀念物 第三卷 第二號) 三好 正八 學 一 冊

美濃大垣より遠からざる霞間ヶ谷を櫻の名所として記せるものなり。

二五二 同寫真 一組

二五三 霞間ヶ谷櫻繪葉書 一冊

二五四 めぐみの花 井上 淑 安政 七年 一 冊

河島堤に植ゑたる櫻に就ての和歌を集めたるものなり。

二五五 櫻花帖 同 上 一 冊

河島堤の櫻を詠じたる諸家の詩を集めたるものなり。

二五六 東都名所花曆案内 一枚

江戸附近の花の名所を地圖に現せるものにして、其中櫻の名所をも載せたり。

二五七 花信風 (寫本) 十 寛政 五年 亭 一 冊

江戸當時の櫻の名所并に名木の所在を擧げ、開花期を記せるものにして、首に寛政甲寅(六年)の花曆とあり。

二五八 花見のしをり 忍川 天保 四年 一 折

彼岸櫻七箇所、絲櫻十三箇所、櫻二十八箇所、淺黄櫻の五箇所の名所を擧げ



たり。

二五九 四季遊覽圖繪 みやびのしをり

英 泉 則房 一折  
天 保 六 年 畫

彼岸櫻四箇所、絲櫻八十八箇所、單櫻六十四箇所、八重櫻三十七箇所を擧げたり。其中に青山長者ヶ丸の名あり。

二六〇 花鳥曆

天 政 五 年 由 一 冊

櫻の名所二十八、八重櫻の名所十三を擧げたり。

二六一 武江産物志

常 崎 七 年 正 一 冊

櫻の名所五十二を擧げたり。

二六二 鹽松勝概 上

岡 治 二 十 五 年 仍 一 冊

松島に関する漢文の記行なり。本文の前に鹽竈櫻の圖竝に略記あり。

二六三 飛鳥川十二景詩歌竝碑

金 輪 寺 第 十 二 世 宥 祕 一 冊  
安 政 五 年

飛鳥山の名所を圖説せるものなるが、此中に櫻を寫せるものあり。

二六四 飛鳥山の花

齊 藤 正 謙 筆 一 幅

齊藤拙堂の國詩にして、

きのふこすけふまたこすはあすかやま

はなのさかりをあたにすきなむ

とあり。

二六五 花の友遊山双六

重 宣 畫 一 枚

上部に飛鳥山の花盛りの圖を添へたり。表紙は兩大師附近の絲櫻の圖を現せ



り。

二六六 各地櫻の名所案内

汽車汽船ポケット旅行案内  
大正六年四月 一册

附録として全國七十四箇所の櫻の名所を記せり。

二六七 勿來關碑 石榻

加茂季鷹  
文政五年 一幅

源義家の「ふくかぜを」の歌を書し、名所としての勿來の關趾に千歳集に入れる此古歌を記せる碑を建つることを記し、後に自己の狂歌一首を添へたり。

二六八 勿來關碑 石榻

筒井憲  
嘉永四年 一幅

前記の碑の背面に彫刻せる文にして、建碑の由來を略記せり。

二六九 山莊碑 石榻

間宮士信  
文化二年 二面

碑面には山莊碑、裏には間宮士信の朝妻櫻の由來を記せる文を刻せり。寶永年間遊女朝妻と云ふもの切支丹を信じ刑せられんとせるとき、獄邊の櫻樹を指し其開花を觀て死せんことを乞へり。官之を憐み乞ひを許すと。依て後世此櫻を朝妻櫻と呼べりと云ふ。

二七〇 不斷櫻碑 縮刷

山田直行  
慶應二年 一枚

伊勢白子觀音の不斷櫻の傍に建てたる碑の文にして、四時開花する櫻にちなみて佛力を述べたるものなり。

二七一 不斷櫻附り間 (謠本)

版行詳年 一册

伊勢白子山觀音寺境内の不斷櫻の由來を謠曲に作れるものにして、都より勅



使下り不斷櫻を見に來れるとき漁夫に装へる花の精に逢ひ問答する體を仕組  
みたるものなり。出版年代は明ならざれども、本の終に「右不斷櫻毎年八月  
十八日於觀音寺會式能仕候直正本令開判者也三月日勢州白子觀音寺門前本屋  
北村氏」とあり。

二七二 十六日櫻しほり

宮脇通赫 一册  
明治四十二年

伊豫道後温泉郡御幸村大字山越字櫻谷にある十六日櫻の來歴、傳説を記した  
るものにして、終に明治十一年に建てたる十六日櫻の碑文、同櫻の保存主意  
書、明治三十年に作れる孝子櫻之碑文を載せたり。

二七三 感孝櫻誌

田中道圓 一册  
明治四十二年

前記の山越なる龍穩寺の境内(本堂の前)に樹てる十六日櫻の由來記を載せ、  
此櫻に就ての古今の詠草を蒐めたり。和歌、詩、俳句數多あり。古人の作の

中には冷泉爲村の長歌、短歌、釋明月の十六日櫻記、宇佐茂村の續十六日櫻  
記等あり。

二七四 温泉郡御幸村大字山越古蹟櫻谷十六日櫻

山越不退寺 孝子櫻保存會 一枚

十六日櫻の來歴、孝子櫻之碑、爲村卿の和歌等を載せたるものなり。

二七五 十六日櫻寫眞

一枚

二七六 同 繪端書

一枚

前記の龍穩寺境内の同櫻を示せるものなり。

二七七 柏木右衛門櫻

醉翁筆 一幅

右衛門櫻は古來著名の櫻にして、現時も尙後繼木あり。此圖は同櫻花の特色



を寫生的に現せるものなり。

二七八 瀧之川櫻圖

醉 翁 一幅

江戸時代の瀧の川の或る山櫻を寫したるもの。

二七九 鹽竈櫻の圖

醉 翁 筆 一幅

鹽竈櫻（赤芽、白花、八重、大輪）を寫し、之に齋藤彦磨が

みちのくのちかの鹽竈近からは

うらく舟のよりて見ましを

と續せるものなり。

二八〇 須磨寺の若木の櫻の繪葉書

一枚

須磨寺の若木の櫻は源氏物語に因みて名づけたるものにして、古き木の株よ

二八一 同上制札寫 木版

一枚

り絶えず新しき芽を生ずるによりて此名あり。現今にても此木は遺れり。

昔より若木の櫻の傍に建てたる壽永年間武藏坊辨慶の書きたりと稱する制札の文の寫なり。

二八二 同上繪葉書

一枚

二八三 同上扇面

一

二八四 石薬師義經櫻

廣 重 筆 一折

二八五 名所草木腊葉帖

名所櫻花五十七品貼付 江戸時代 一折

全國の名所より持還れる草木の小片を貼付けたるものにして、其中に各地の



櫻花五十七品を貼付せり。

追加

狂歌の部

狂歌葦垣集

燕栗園、四谷庵、龜玉堂選  
嘉永元年 一冊

歌人葦垣仲住の追悼の爲に集めたる狂歌集にして、歸雁と雨中花とを兼題として詠めるものなり。卷首に尙古堂の序、仲住の歌、北溪筆、雁と櫻花の圖三枚を載せ、それより諸國より送り來れる歌千餘首と俳句十餘を收めたり。

俳句の部

花の翁

風化坊選  
天明三年 一冊

青蘿と選者の序に次で、芭蕉翁の畫像の上に翁の「木のもとには汗もなますもさくらかな」の句を書きたるものを掲げ、それより季吟、貞室、任口、湖春、北枝、万子、去來、丈艸、嵐雪、其角、野坡、許六、文考、越人以下希因に至るまで總計八十八人の花の句を載せ、更に尾張、美濃、三河、伊賀其他諸國の俳人の花の句、終に花の俳諧の連歌三十六韻を收めたり。此書の外に同人の選める「雪の翁」一冊ありて雪の句を集めたり。



GANSHODO-SHOTEN  
KANDA TOKYO  
田神 齋  
店書堂松巖

特1  
2216



